

献呈の辞

佐伯直秀先生は、昭和五八年三月末をもって鹿児島大学を定年退職された。

先生は、昭和一七年九月東北帝国大学法学部法学科を卒業された後、民間企業で活躍されていたが、戦後は教育・研究界に転職され、鹿児島県立短期大学教授から、昭和四五年四月本学教授に就任された。以来本学法文学部の発展にはもちろんのこと、学生教育・指導及び後輩の育成に顕著な業績を残された。特に長老教授として、法学部法学科の発展・充実に意を注がれ、石神兼文学長及び法学部の教官とともに「和」の精神をモットーとされながら、法学科にとつて今後の大きな飛躍台となる本学大学院法学研究科の設置に取組まれ、これを昭和四四年四月に文部大臣の認可をうるという仕事をされた。ついで、学長として転出された石神兼文教授の後任人事及び昭和四四年三月末をもって定年退職された三人（鯨岡稔雄・西岡久頼・萩大輔先生）の方々の後任人事の補充については東西奔走され、文字通り心血を注がれ、ようやくにして行政法、刑法、民法、労働法のそれぞれの講座主任を充足するという大仕事を遂行された。

われわれ法学科教官一同は、先生の御存任中のこれらの労をねぎらい、また、その間の先生の御指導に感謝するとともに、今後の御助力を願って、この法学論集（第一九卷三二号）を先生に捧げることにした。

われわれとしては、この号を佐伯先生退官記念号としてふさわしいものとするために、先生の最終講義の玉稿（法について思うこと、あれこれ―法の本質と公平について―）を戴くことを申出て、それを寄贈して戴いた。この玉稿は、先生が商法担当教授として、永年蓄積された基本的な法律学思想について講述されたものであり、先生にしてこの思想ありという、まことに先生の退官記念号としてふさわしいものである。このようにして、この記念号の内容が先生との合作とな

ったことは、何よりもわれわれ教官一同のよろこびである。

佐伯先生は、退職後も鹿児島市に居を構えておられる。そして裁判所調停員及び鹿児島県・鹿児島市の公職を兼務しながら、昭和五八年四月から九州産業大学に隔週一回出講されている。先生には北九州大学、愛知学院大学の他五大学より就任要請があつていたと聞く。しかし先生はそれらをすべて断わられて昭和五七年末から、補助金不正受給事件で揺れに揺れている九州産業大学に就任されたといういきさつがある。

これは「一旦就任を決めていた以上、自分は九州産業大学が揺れているからといって、それを拒否することはできない」という先生の律気な信念からの行動であつた。このことで、言葉ではなく行動をもつて人の生き方を示される先生の古武士としての姿を垣間みることになった。打算的風潮に汚れている現代社会で稀にみる崇高な行動であると評する以外になり。

われわれ教官一同は、先生がいつもの元氣な御姿で、益々御健康に留意され活躍されるよう御祈りし、これをもつて献呈の言葉といたします。

法学科主任

大

坪

稔